

2005年5月11日
第22回庭野平和賞贈呈式

ハンス・キュング博士 受賞記念講演

この世には、叶わぬ夢というものがあります。その一方で、叶うことなど夢にも思わなかったことが現実になることもあります。私がまだ若き神学教授だった1964年に初めて日本を訪れた時も、その後1982年に、立正佼成会の教団本部で庭野日敬開祖にお目にかかる榮譽に預かった時も、まさか私が誉れ高き庭野平和賞の受賞者として、この場に立つことがあろうなどとは思いませんでした。

この受賞は、私にとって、極めて名誉なことであり、私を今年度の受賞者としてお選びいただいた庭野平和財団に心から感謝申し上げます。私はこの榮譽を三重の励ましと受け止めております。すなわち、

私個人に対しては、長年取り組んできたキリスト教会の再一致と、世界の諸宗教間の対話を進める活動に対して、

私が会長を務める「地球倫理財団」に対しては、同財団が進めてきた異文化ならびに諸宗教をつなぐ調査と研究、教育、および交流等の活動に対して、

そして、人類の調和と、より平和な世界を実現する基盤として、地球規模の倫理の確立に向けて努力している世界中のすべての人々の活動に対しての、三重の励ましと受け止めているのであります。

地球倫理の確立に向けた、まさにその努力に対する榮譽として、私はこの賞を拝受致します。ここで地球倫理のいくつかの特徴について触れたいと思います。

ご臨席の皆さまにはすでにご存じのこととは存じますが、

- ・ 地球倫理は、新しいイデオロギーや思想の上位体系ではありません。
- ・ 地球倫理は、さまざまな宗教や哲学の特定の倫理体系を不要にするものではありません。たとえば、仏陀の説法や、孔子の格言、ヒンドゥー教の聖典の叙事詩「バガヴァッドギータ」、ユダヤ教の全律法、聖書の「山上の垂訓」、あるいはイスラームのコーラン等の教えに対し、地球倫理がそれらにとって代わるものであるという見方は間違っています。
- ・ 地球倫理とは必要最小限の共通価値であり、基準であり、基本的態度であって、それ以外のものではないのです。

言うなれば、

- ・ 人間を律する価値観、絶対不変の基準、および道徳的態度に関する必要最

小限のコンセンサスであり、教義や神学上の否定しがたい違いがあるにもかかわらず、世界のあらゆる宗教の賛同を得ることが可能で、なおかつ信仰をもたない人々にも支持されるべきものなのです。このコンセンサスは、1993年に米国のシカゴで開催された万国宗教会議で採択された「地球倫理宣言」に明文化されています。

「地球倫理宣言」（1993年シカゴでの万国宗教会議）について

「シカゴ宣言」で示された「地球倫理」は、人類の共同体や社会の存続にとって、欠かすことのできない二つの原則に基づいています。

第一に、すべての人間は人間性を共有しており、ゆえに普遍的な人権の基礎として奪われることのない人間の尊厳に基づいて、「何人も人間らしく扱われなければならない」のです。

この原則ではあまりに形式的であるため、「シカゴ宣言」は「人類の多様な宗教および倫理的な伝統のなかに見受けられ、かつ根強く残っている」第二の原則を復活させています。いわゆる応報思想の「黄金律」の名で周知されているその原則とは、「何事も他人からしてほしくないことは、他人にもしてはならない」というものです。この否定形の格言は裏返すと、「何事も他人からしてほしいと望むことは、他人にもその通りにせよ」ということです。

紀元前5世紀に中国の思想家である孔子が著した「論語」に、こうした人間のとるべき姿勢としての基本的なルールがすでに言及されており、また、世界のさまざまな宗教の教えの中に、わずかに文言の違いこそあれ、同様の基本的なルールが見出されることは驚くべきことです。（注1）

仏教の経典の中にも次ぎの言葉があります。「自分にとって心地よくも嬉しくもないことは、他人にとっても同じことである。自分にとって心地よくも嬉しくもないことで、どうして他人に迷惑をかけられようか。」（サンユッタ・ニカーヤ）

これらの人間としてふさわしい行為のガイドラインは、あらゆる宗教にとどまらず、非宗教的な倫理規範のなかにも見られるものです。それゆえ、すべての人間に受け入れられるべきものであるという意味で、人間性の倫理の基礎になり得るのです。

シカゴの万国宗教会議の折に、ある仏教指導者は、4つの指針を通して仏陀の声を聞くことができると私に教えてくれました。そう語った指導者は、おそらく仏教の「五戒」の中の4つの戒めを念頭におかれていたのでしょうか。すなわち、

私は生き物を殺さないことを誓います。
私は与えられていないものを取らないと誓います。
私は性的な不品行をしないことを誓います。
私は嘘をつかないことを誓います。

という戒めです。（ちなみに、第5の教え「私は酩酊の原因になるものを取らないことを誓います」については、諸宗教間のコンセンサスが得られていません。仏教のほかいくつかの宗教に限定されているため、「地球倫理宣言」には含まれておりません。）

また「地球倫理宣言」を通して、他の宗教者にはそれぞれの宗教もしくは哲学的伝統から発せられる声が聞こえているかもしれません。ここに万国宗教学会議と「地球倫理宣言」のユニークな価値があるのです。なぜなら、宗教の歴史が始まって以来初めて、世界中のさまざまな宗教の代表が一堂に会して、一連の共通な倫理的指針について基本的な合意を得ることができたからです。そして、この「地球倫理宣言」が内包する推進力とその目指すところは、宗教間の協力と平和を推進する立正佼成会の活動を先導し続けている庭野日敬開祖と庭野日鑛会長の深遠な思想に通じるものであります。

法華三部経と庭野日敬開祖の教えについて

これまでに述べてきたことを受けて、ここで庭野日敬開祖が提唱された、「平和を成就するための四段階の実行」について触れたいと思います。法華経の教えに基づいて、庭野開祖が1984年に出版された「平和への私の提唱」の中で詳らかにされたことです。

庭野開祖は、その生涯をかけて、自らの信念を実践するためにたゆまぬ精進をされ、それゆえ日本のみならず、アジアから世界の広きに渡って、諸宗教間の協力と平和を推進するパイオニアとなりました。そして立正佼成会は調和と対話と平和に向けて、実力とともに世界的に認知を得た教団となりました。

庭野開祖が提唱された「四段階の実行」は、地球倫理プロジェクトで開発されている洞察と接点を持っているようです。

1. 庭野開祖は、人種や民族や国家は違っても人間はみな仏の子なのだから、誰もが自分の兄弟姉妹であると信じきって、「菩薩行」を行うことを提唱しました。開祖はこの真理の実現に向けて最前列に立つよう宗教者たちに呼びかけたのです。人類は一つの家族であることに気づくことが、世界平和の大前提であると私は思います。「地球倫理宣言」でも次のように提唱されていま

す。「われわれは相互に支え合う存在である。われわれはみな、一人ひとりが全体の幸福に依存している。ゆえにわれわれは、人、動物、植物といった生命あるものの共同体を尊重し、また地球、空気、水、大地の保全に配慮する。」

2. 庭野開祖は、他の生命を奪ってはならない、人のものを奪ってはならない、そして自分を正当化するために嘘をついたり、憎しみから人の悪口を言ってはならない、という仏陀の教えを強調されました。このことを背景に、開祖は宗教者に対して「諸の徳本」を植えることを呼びかけました。このように、「地球倫理宣言」の原則と指針は、釈尊の教えの中にも見出されることは明らかであります。

3. 庭野開祖はさらに進めて、その属する宗派を問わず、善をなすことをよしとするすべての人々に「正定聚」（よいことをしようと心を定めた人々の集まり）に入ること、すなわち共通の善のために協力することを呼びかけました。まさに、信仰心のあるなしに関係なく、世界平和の推進は良き志をもつすべての人々が連帯して初めて可能になるのです。

4. そして、庭野開祖は四番目の条件として、「一切衆生を救おうという心をおこす」ことを提唱されました。他者のために奉仕する精神で、エゴイズムを克服するということです。開祖は、救済や苦悩からの解放を、単なる精神的な価値としてではなく、個人レベルでも集団レベルにおいても極めて社会的な務めであると理解されていました。

「地球倫理プロジェクト」は、人間には権利だけではなく、人類同胞をはじめ生きとし生けるもの、そして地球環境全体に対する責任があることを力説することで、こうした庭野日敬開祖の考え方を分かち合うものです。

「人間の責任に関する世界宣言」（インターアクション・カウンシル 1997年）

地球倫理の確立を目指す過程において、さらに意義深い国際的な展開としてあげられるのが、「地球倫理プロジェクト」と国家元首や首相経験者をメンバーとするインターアクション・カウンシルとの提携です。（注3）

インターアクション・カウンシルは、日本の福田赳夫元首相（1995年に逝去）の提唱で1983年に設立され、現在も事務局は東京におかれています。インターアクション・カウンシルのメンバー（現在30名）は、地球規模の政治的、経済的、社会的な問題を分析および検討し、解決に向けた提言を行っています。同カウンシルは、人類が直面する諸問題について国際的な共同作業を促進し、かつその結果を政府首脳や意志決定者に直接伝えています。

インターアクション・カウンシルと「地球倫理プロジェクト」のシナジー（相乗的協調）が実現したのは、同カウンシル初代会長でドイツ連邦共和国（旧西ドイツ）の元首相であるヘルムート・シュミット氏の、倫理をめぐる諸問題に対する幅広い関心と、インターアクション・カウンシル代表として人類共通の価値観に向けられた特別な探究心に負うところが大きいでしょう。それは、ここ東京で事務局長を務める宮崎勇氏と、非常に有能な渥美桂子氏（株式会社インフォプラス代表取締役）の活躍にも支えられています。

1993年のシカゴでの「地球倫理宣言」が、こうした一連の価値概念をすでに提唱していたこともあって、私はインターアクション・カウンシルから「人間の責任に関する世界宣言」の起草に力を貸してほしいと依頼されました。同カウンシルは、そうした宣言によって、人間の権利と責任の関係を適切に表現できると考えたのです。宣言文は1997年に同カウンシルによって採択されました。その内容は「地球倫理宣言」の構成に密に添いつつ、しかもその原則や絶対不変の指針を個人やコミュニティの責任へと転換した内容になっています。インターアクション・カウンシルは、「人間の責任に関する世界宣言」は「世界人権宣言」に対する倫理面からの支援であると理解すべきとしています。

「人間の責任に関する世界宣言」は、また、二つのアプローチの調和を目指すひとつの試みとも言えます。すなわち、個としての人間とその権利を強調する“西洋型”と、社会に対する個人の義務を中心にすえてコミュニティーを最優先する、いわゆる“アジア型”の伝統の二つです。こういった意味で、インターアクション・カウンシルによる宣言は、普遍的な人権が文化間の壁を超えて正当性を持ち得るかを議論する上で有用な要素を占めるといえるでしょう。とはいえ、「地球倫理宣言」ならびに「人間の責任に関する世界宣言」の両宣言は共に、そもそも倫理上の訴えであって、法律的な文言ではないことを思い起こすべきでしょう。

1893年と1993年に次いで、1999年12月、第三回の万国宗教会議が南アフリカのケープタウンで開催されました。この第三回会議の主な課題のひとつが、「地球倫理プロジェクト」の過去六年間の過程をまとめ上げ、その具体化をさらに推し進めることでした。作業は、「人類の指導的機関への呼びかけ」を基に進められました。ここでいう機関とは、社会に対して決定力と影響力をもつ分野のことです。すなわち、宗教と霊性、行政府、農業、労働、産業、商業、教育、芸術、通信メディア、科学、医療、国際的政府間機関、また市民社会の組織を指します。こうした分野の人々が、地球規模の倫理の原則ならびに指針を受け入れ、具体的な課題として取り組むことを求められているのです。（注4）

しかし、残念なことに、その後2004年にスペインのバルセロナで開催された万国宗教会議では、相互の交流と議論を進めるためのユニークなフォーラムはもたれましたが、「地球倫理プロジェクト」についての関心は極端に低いものでした。経済や通信や科学技術のグローバル化には、倫理のグローバル化が相伴わねばならない時代であるだけに、このことはなおさら悔やまれます。

グローバルな時代が英知を必要としている

科学とテクノロジーの進歩によって人類の地平は格段に広がり、また私たちを取り巻く世界に対する認識が深まった結果、偉大な宗教や伝統的な哲学が持つ智慧に対して、現代の教育においては意義を持たないものと感じている人がたくさんいます。確かに、グローバル化のおかげで、私たちが活用し、また消費することのできるデータ、情報、そして知識の量は大いに増えました。しかし、その一方で時代を超えて受け継がれてきた教育方法、なかでも智慧を受け継ぐための伝統的な手法がひどく損なわれています。私たちは、データと情報を混同したり、情報と知識を混同したり、また知識と智慧を混同しないように気をつけなくてはなりません。人間は、単に情報や知識を与えられるのではなく、智慧を備えた人間になる方法を身につける必要があるのです。

現代の情報化時代の中で特に重要な知恵を身につけるために、大切な手法が三つあります。

すなわち、

- ・ 相手の言うことに耳を傾ける術
- ・ フェース・ツー・フェース（面と向き合って）でコミュニケーションをとる術
- ・ 祖先から受け継いだ知恵を蓄積していく術

です。

人類の偉大な宗教や哲学的な伝統は、いかにしたら真に人間らしい人間になれるかを私たちに教えています。祖先から受け継がれて蓄積された知恵というのは、人々の模範となった人物の思想や行動によって、現実の社会の中で具現化された生きる術のことです。範を示されることで学ぶこと、すなわち言葉よりも実際の手本から教えられることでしか、われわれは真に人間らしくなるすべてを身につけることはできないのです。人生を意味あるものにする精神的な資源から、自分自身を断ち切ってしまう余裕は私たちにはないのです。

真に人間らしい人間になるために必要なのは、知識や技能の修得よりも、人格の涵養です。技術面と同様に文化面での能力が、現代社会に適合して生きていくために求められています。倫理面および認識力の面での知性は人間の成長

に不可欠です。前者なしには、社会の倫理的な枠組みは危うくなるでしょう。霊的な思考や行動は、適度な物質的状况を整えることと共に人間社会の幸福のためには不可欠です。文化的な能力もまた、大いに望まれます。

倫理面での知性は社会が結束するために必要なものです。霊的な思考や行動は、余裕のある人々だけが味わうことのできる贅沢ではありません。それは精神面での生活のなかで必要不可欠な部分を占めており、文化に対して特有の個性や他とは異なるエトス（特性や気風）を与えるものなのです。

結びとして

地球倫理に関する考えに対して、私はしばしば懐疑や不信の目を向けられました。地球倫理は実現可能か？ 人間はそうした規範に常に逆らって行動するものではないだろうか？といった疑問です。

2003年12月、国連のコフィ・アナン事務総長は、ドイツのチュービンゲン大学で行った地球倫理講義のなかで、これらの疑問に対して力強い回答を示されました。そこで私は、アナン事務総長の言葉を私の結びの言葉に代えて引用させていただきたいと思います。

「我々は、いまなお普遍的な価値観を有するのか？ 講義のタイトルに掲げた、この刺激的な問いに対する私の答えは、イエスです。しかし、普遍的な価値観を当然なものと思っははいけません。

それは、注意深く考え抜かねばならないものです。

それは、守らなければならないものであり、

そして、更に強化しなければならないものです。

そして、私たち自身が、私生活においても、地域社会や国家においても、ひいては世界にあっても、自らが宣揚する価値観に添った生き方を貫く意思を、自分自身の中に見出す必要があるのです。」

ご臨席の皆さま、この素晴らしい式典において、このような名誉と、励ましと、喜びを得られたことを重ねて御礼申し上げます。

【注】

注1 諸宗教の教典中の表現は、ハンス・キュング博士、ヘルムート・シュミット元西独首相（共編）『地球倫理と地球的责任、2つの宣言（仮）』（ロンドン、SCM）1998年刊、68－69ページにリストアップされている。

注2 参考文献 庭野日敬著『平和への私の提唱』（和英併載）1984年佼成出版社刊、（38－41頁）

注3 ハンス・キュング博士、ヘルムート・シュミット元西独首相（共編）『地球倫理と地球的责任、2つの宣言（仮）』ロンドン、SCM。1998年刊。同宣言文はインターアクション・カウンシルのウェブサイト (www.interactioncouncil.org) から多言語でダウンロードが可能。

注4 「人類の指導的機関への呼びかけ」の内容についての請求先は、万国宗教会議のためのカウンシル宛まで。

The Council for a Parliament of the World's Religions, P.O.Box 1630, Chicago, Illinois 60690-1630, USA, (www.cpwr.org.)